

小学校における CLIL 体育の授業実践に関する事例研究 — 「跳び箱運動×感嘆詞」の内容的視点から —

濱本 想子*・白石 智也**・赤松 一成**・敖敦 其其格***・白石 愛**・
辻 亮太**・大城 穂乃香**・磯村 美菜子**・岩田 昌太郎
(2019年12月9日受理)

A Case Study of Efforts to Introduce “CLIL Taiiku” at Public Elementary School
: Practice as “Vaulting horse with exclamation”

Aiko Hamamoto, Tomoya Shiraishi, Issei Akamatsu, Aodun Qiqige, Ai Shiraishi,
Ryota Tsuji, Honoka Oshiro, Minako Isomura and Shotaro Iwata

The purposes of this study are following two points; (1) to report a practice of “CLIL Taiiku” in elementary school, (2) to clarify achievements and issues of the practice, and the possibility of “CLIL Taiiku”. “Taiiku” means physical education in Japanese, and the reason why we use Japanese word is to look for Japanese way for CLIL in PE. Specifically, the practice was carried out for 6th and 5th grades. In order to clarify the results and issues of these classes, we conducted a group interview survey with teachers who practiced these classes and observers. The contents were analyzed using the KJ method (Kawakita, 1986).

As a result, CLIL and “Taiiku” are compatible, and it can be suggested that “CLIL Taiiku” has a positive effect on community creation between pupil and pupil, pupil and teacher, and also teacher and teacher in the school. On the other hand, there were some issues about teacher, such as English level and burden on “CLIL Taiiku”.

Key words : CLIL, physical education, elementary school

1. はじめに

世界のグローバル化に伴い、日本国民の英語運用能力の向上が重要視されている。2017年の学習指導要領改訂では、小学校3年生から外国語活動が必修化、そして、小学校5年生から教科化が実施された(文部科学省, 2017)。この潮流の中では、「英語についてよく知っている」ことよりも「コミュニケーションのために英語を使いこなせる」(工藤, 2018, p. 41)ことが求められている。

他方、元来の文化的に復言語主義であったヨーロッパ諸国では、様々な第二言語習得の手法が編み出されてきた。その中でも、本研究で着目するCLIL (Content and Language Integrated Learningの略称)は、「内容言語統合型学習」と訳され、「外国語を用いて教授内容を学ぶ学習方法」

(工藤, 2018, p. 40)や「教科の学習と外国語の習得を同時に達成する目的を持った教育方法」(米山, 2011, p. 49)と定義されている。ヨーロッパに端を発するCLILであるが、日本においても、近年研究が行われるようになってきた。一方、未だにCLILの先行実践は少なく、日本における新たなCLILの在り方を模索していくためにも、学校ベースの実践の蓄積が必要であるといえる。

そこで本研究では、このCLILを用いて、小学校の体育授業で実践を行った。まずは、研究の背景として、CLILの概要、先行研究及び実践の概説、そして、研究の目的を明示していく。

2. 研究の背景と研究の目的

2.1. CLILとは

*広島大学教育ビジョン研究センター教育研究推進員, ** 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期, *** 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

CLILは、「4C」を中心に据えた学習方法である点の特徴として挙げられる。4Cとは、Content(内容)、Communication(言語)、Cognition(思考)、Community/Culture(協学・文化)の頭文字からなる4つの軸のことであり、全てに等しく焦点を当てていることがCLILの方針といえる(Coyle et al., 2010; 二五・伊藤, 2017)。なお、本研究では、これらの4Cを「CLILにおける4C」と総称することとし、授業計画や調査、分析、考察を行う際の視点として用いることとした。以下にそれぞれのCについて概説していく。

1) Content (内容)

Contentが意味するのは、教科のテーマやトピックである(奥野, 2018)。CLILの基本原理は、言語学習をそれ単体で行うのではなく、意味のある文脈の中で行わせようとするものである(Coyle et al., 2010)。そのため、言語学習のために用意された内容ではなく、教科のテーマやトピックが適しているといわれている。

2) Communication (言語)

Communicationとは、目標とする言語を使って内容に根ざした発見や、各々の考え・意見・態度を他者に伝えていくことである(Coyle, 2007)。

3) Cognition (思考)

Cognitionは、思考と訳されることが多い。学習者の思考を、LOTS(Lower Order Thinking Skills)と呼ばれる低次な思考から、HOTS(Higher Order Thinking Skills)と呼ばれる高次な思考に導く(Mehisto and Marsh, 2011)。したがって、思考を促進するように授業を展開していくことが肝要である。

4) Community/Culture (協学・文化)

CLILの授業は、ペアワークやグループワークを取り入れる。ここにおけるCommunity/Cultureとは、広義において学習者の所属している国の文化や共同体への理解などを指す一方で、狭義において多様なグループメンバーとの経験や意見の交流によって養われる相互理解などを意味する(奥野, 2018)。

2.2. CLILを取り入れた体育の効果と日本における先行実践

では、CLILと体育にはどのような関係性があるのだろうか。2007年頃、初めてCLILを取り入れた体育に関する研究がドイツで試行されて以降、その理論と実践に関する研究が、欧米を中心に広まっている(例えば、Coral and Lleixà, 2014;

Celina and Oscar, 2017)。一方、日本においても、CLILを取り入れた体育の効果が注目されており、「体育と英語」という教科横断型の学びが話題となっている(二五・伊藤, 2017; 岩田・赤松, 2019)。その理由の1つとして、運動を通して言語を学ぶことは、子どもが第一言語を学ぶ過程と非常に似ており、体育は言語を学ぶために優れた科目であるとされていることが挙げられる(Clancy and Hruska, 2005; Coral, 2010)。

さらに、日本におけるCLILを取り入れた体育の実践事例からは、他の副次的な効果も報告されている。例えば、二五・伊藤(2017)は、サッカーの授業を通して、CLILにおける4Cそれぞれの有効性を明らかにしようとした。その中で、(1)サッカーの内容に加えて英語の表現方法も積極的に教え合う場面が増えたこと、(2)作戦タイムなどを用いて、問題解決や情報処理などの身体運動的知能を活性化させたこと、の2点に関して、大きな成果として捉えている。また、岩田ら(2018)は、中学校で音楽科と体育科を対象にCLILの実証的な研究を実施している。その結果、体育科においては、生徒の体育の技能やコミュニケーションスキルだけでなく、体育教師の専門的な学びや成長が促進される可能性について言及している。

以上のことから、CLILを取り入れた体育は、学習者に対して、4Cに係る効果だけでなく、積極性や主体性を促進する可能性があるといえる。また、教師の専門性開発という側面からみても、有益な学習方法であることが窺える。

なお、英語では、CLILを取り入れた体育について、CLIL in PEやPE in CLIL、PE through CLILなどと称されている。しかし、CLILはヨーロッパの複言語主義を背景に生まれた教育法であり、他国と隣接していない日本とでは文化的背景が異なると考えられる。そこで本研究では、日本で実践されるCLILを取り入れた体育として強調するために、「CLIL体育」(CLIL Taiiku)と表記することとした。

2.3. 小学校におけるCLILの実践

先述したように、小学校で外国語活動が必修化及び教科化されたことに伴い、小学校教育においてもCLILが注目され始めた。

例えば、二五(2013)は、英語の学習に算数の計算の活動を取り入れることで、小学校高学年児童の知的好奇心を引き出し、自然と英語の数字に関わる語彙を定着させることができたと報告して

いる。また、松井・藤原（2017）は、算数の問題を提示し答え合わせをするまでの一連の流れを CLIL に当てはめることで、児童だけでなく教師も英語に慣れ親しむことができる可能性を明らかにした。さらに、藤原（2018）は日本の「いろはがるた」の様式で、アルファベット 26 文字の音を組み合わせさせたカルタを用い、日本文化を考えさせる授業実践を報告した。加えて、坂本・滝沢（2019）は、オリンピック・パラリンピックを主題にした CLIL 授業を実践している。

このように、小学校への CLIL の導入に向けて、様々な実践や研究で一定の成果が報告されている。また、英語によるコミュニケーションの素地を養う場としての小学校では、今後さらに CLIL の実践や研究は増えていくと予想される。

2.4. 問題の所在と研究の目的

しかし、CLIL 体育の実践及び小学校における CLIL 実践の先行事例は未だ少なく、更なる蓄積が必要不可欠であるといえる。しかも、小学校における CLIL 体育の実践例は管見の限り見当たらない。そこで本研究では、以下の 2 点を目的とし、小学校における CLIL 体育の実践に取り組んだ。

- (1) 授業実施者と観察者からみる CLIL 体育の実践の成果と課題を明らかにすること
- (2) 日本における CLIL 体育の可能性を検討すること

なお、本研究において授業実施者と観察者の視点に焦点を当てた理由として、松尾（2019）の指摘にもあるように、学習者の学習成果や反応だけを頼りに、CLIL の効果を結論付けることへの危惧を孕んでいるからである。多くの実践で語彙力テストやアンケートなどが実施され、その成果はある程度報告されている。しかし、授業実施者と観察者の意見から、成果や課題についてまとめられた研究は少なく、日本における CLIL 体育が発展するために必要な示唆を得ることができると考えた。

3. 研究方法

3.1. 調査対象及び授業の概要

調査対象は、2019 年 9 月に、A 市立 B 小学校において 5 年生（19 名）及び 6 年生（21 名）の 2 クラスを対象に実施された、CLIL 体育の授業であった。なお、本実践では、日本において英語でのコミュニケーション能力の向上が求められていること（工藤，2018）、そして、日本の教育における外国語学習の対象言語が英語である場合が多いことから、使用言語（Communication）は英語とした。

また、本実践は、CLIL の研究に着手している大学教員及び大学院生によって実施された現職教員に対する CLIL 体育の研修会の一部であった。そのため、授業実施者は英語が堪能な大学院生 2 名であり、第一筆者及び大学教員 1 名と大学院生 5 名、そして B 小学校の教員が授業を観察した。授業を実施した大学院生 Y と Z は、中学校及び高等学校の保健体育の一種免許状を保持している。ただし、対象とした児童とは初対面であり、ラポールは築けていない状態であった。なお、事前に B 小学校の校長及び対象となったクラスの担任の教員に本研究の意図と内容について説明し、調査に関して承諾を得た。

両クラスで実施した単元は、器械運動（跳び箱運動）における開脚跳びを題材とした。また、補助運動・主運動の双方でシンプルな授業の流れを意識し、普段の体育授業と体育の教科内容の面で差異が出ないように心がけた。英語教育の視点からは、感嘆詞の内容を取り入れた。なお、教師が使用する英語は、発問の際に数回用いた英文と感嘆詞のみとし、児童も感嘆詞の他には「Okay」や「Yes」などの簡単な単語のみを使用させた。表 1 は、対象とする CLIL 体育の授業の概要を、また表 2 は、その詳細な流れを示している。

本実践において跳び箱運動と感嘆詞という 2 つのテーマを設定した意図は、以下の通りである。

表 1 本実践の概要

対象者	授業の内容・目標	授業者
5 年生 (5 時限目) 14:00~14:50	跳び箱運動 ①今できる技をより美しく ②英語の感嘆詞を使ってみよう	大学院生 Y (大学院博士課程前期 2 年) 海外 (英語圏) に留学経験あり, TOEIC 公開テストスコア 800 点, 中・高保健体育一種免許状所有
6 年生 (6 時限目) 14:55~15:45		大学院生 Z (大学院博士課程前期 2 年) 海外 (英語圏) でボランティア経験あり, TOEIC 公開テストスコア 800 点, 小学校一種免許状及び中・高保健体育一種免許状所有, 小学校教員経験あり

表 2 本実践の授業の流れ

導入	<ul style="list-style-type: none"> ○準備運動 ○教員の自己紹介 ○英語を用いたスポーツのクイズ ○感嘆詞の学習 ○本時の目的の確認 	<p>スポーツの名前を英語で答える 5年生「Perfect (完璧)」「Good (いいね)」「Close (惜しい)」 6年生「Perfect (完璧)」「Great (すごい)」「Good (いいね)」「Wonderful (素晴らしい)」「Close (惜しい)」</p>
展開	<ul style="list-style-type: none"> ○マットの上で予備運動 <ul style="list-style-type: none"> ・かえるの逆立ち ・かえるの足打ち ・うさぎ跳び ○跳び箱運動 <ul style="list-style-type: none"> ・開脚跳びをより美しく跳ぶ ・評価の規準を明確にする(踏み切り・着手・着地の仕方) 	<p>英語の感嘆詞を用いてペアの児童を評価する</p> <p>英語の感嘆詞を用いて同じグループの児童を評価し、説明する 英語の感嘆詞を用いて他のグループの児童を評価し、説明する</p>
まとめ	○授業のまとめ	



写真 1 5年生の授業風景



写真 2 6年生の授業風景

1) 跳び箱運動を設定した意図

まず、器械運動全般の特徴として、「さまざまな器械の条件に規定されて生み出された『技』に挑戦し、これを達成したときに楽しさや喜びを感じることでできる個人的な運動」(高橋ら, 1992, p.13)であることが挙げられる。また、跳び箱運動に着目すると、「①助走, ②予備踏切, ③踏み切り, ④第1空中局面, ⑤着手, ⑥第2空中局面, ⑦着地」(神家, 1984, p. 101)という7つの運動局面に分けることができる。さらに、子どもたちにとってもその技術構造が分かりやすいため、どこを見るべきか、どのように取り組めばよいのかということ全員で共有しやすいという特徴を有している(久保, 2016)。

つまり、跳び箱運動は、技のポイントを理解しやすく、他者の演技についても評価が簡単であり、コミュニケーションを図りやすいという特質を持っているといえる。また、個人的な運動であるも

の、子どもたちが協同的に学び合うことができる単位であるため、CLILにおける4Cが表出しやすいと考えた。

2) 感嘆詞を設定した意図

次に、英語教育の視点から考えると、小学校高学年という発達段階では、英語での文章を作成することや、会話による意思疎通は困難であると推測された。そのため、B小学校において外国語活動を担当している教員との話し合いも踏まえ、本実践では授業中に児童が発する感嘆詞に着目した。

感嘆詞とは、「感動や応答・呼掛けを表す語」(新村, 2018, p. 668)と定義されている。そのため、技能教科である体育授業においては、他の教科と比べても、子どもたちから多く発せられる言葉の1つが感嘆詞であるといえる。また、感嘆詞は、「いろいろな考えを経ずに発せられる第一印象による最初の言葉」(神宮ら, 2001, p. 254)である

ことから、英語への転換がなされやすいと考えた。

したがって、上述した特性を持つ跳び箱運動と組み合わせることで、授業中において相互評価活動が行われやすくなることが期待された。そして本実践では、児童が他の児童に対する言語的フィードバックとして感嘆詞を使用することとした。表 2 にあるように、5 年生の授業では 3 種類、6 年生の授業では 5 種類の感嘆詞を、それぞれ取り入れた。

3.2. 調査内容と調査方法

調査内容は、授業を実施した 2 名の大学院生と授業を観察した 5 名の大学院生及び対象となった研修において指導助言を担当した大学教員 1 名を対象に、第一筆者がインタビューアーとして実施したグループインタビューにおける発話であった。

グループインタビューは、「回答者たちに特定の出来事を思い出させるために、あるいは、その集団のメンバーのあいだで共有されている経験についての装飾された描写に刺激を与えるために」(デンジン・リンカン, 2006, p. 48) 用いられるべきであるとされている。本研究では、観察した 2 つの授業に関して共通認識を持ち、かつ、実施者及び他の観察者の意見も聞きながら意見を膨らませることができると判断し、このインタビュー方法を採用した。また、デンジン・リンカン (2006) によると、グループインタビューでは、半構造化インタビューは用いず、構造化インタビューもしくは非構造化インタビューを用いることが一般的であるという。そこで本研究では、CLIL における 4C に基づく本実践の成果と課題、また、今後の CLIL 体育の可能性という大きく 2 点を明確化し、構造化インタビューを実施した。表 3 は、グループインタビューの項目である。なお、グループインタビューの対象者となった実施者及び観察者は、CLIL における 4C について把握しており、共通の認識を持った上でインタビューに臨んだ。

表 3 グループインタビューの項目

学習者に対する成果 (4C の観点から)
①Content (内容) について、成果と課題を述べてください
②Communication (言語) について、成果と課題を述べてください
③Cognition (思考) について、成果と課題を述べてください
④Community / Culture (協学・文化) について、成果と課題を述べてください
教師に対する成果 (本実践の目的から)
⑤今後の CLIL 体育の実践に向けて期待する点や不安な点などを述べてください

3.3. 分析の手続き

グループインタビューの内容は、KJ 法(川喜田, 1986)を用いて帰納的に分類された。分析の手続きは、以下の通りである。

まず、インタビューの内容を全て録音及び逐語記録化し、テキストデータとした。インタビュー対象者の発言を、その意図が途切れないように切片化し、それぞれを一片の紙片に記入した。そして、それらを一片ずつ熟読し、発言の意味の解釈を行った。次に、内容が類似していると考えられる紙片をまとめ、小カテゴリーを生成した。この小カテゴリーの名前は、カテゴリーにおける紙片が意味することを適切に表すように決定した。そして、小カテゴリーの名前を紙片に記し、それらをまとめて中カテゴリーに抽象化できるか検討した。さらに、同様の手順を踏み、中カテゴリーを大カテゴリーに抽象化した。中カテゴリーに抽象化できなかった小カテゴリーは、そのまま、大カテゴリーに分類した。

なお、この分析における内的妥当性(メリアム, 2004)を高めるために、第一筆者と体育科教育学及び教師教育学を専門とする大学教員 1 名、そして大学院生 7 名とで「仲間同士での検証」(メリアム, 2004, p.298)を実施した。

4. 結果

4.1. CLIL 体育実践の成果

表 4 は、本実践の成果に関するグループインタビュー結果を示している。大カテゴリーとして、「Content」、「Communication」、「Cognition」、「Community / Culture」、「CLIL 体育の可能性」の 5 つに大別された。

第 1 の大カテゴリー「Content」に分類された発言は合計 10 個 (5%) であった。このカテゴリーは、体育の技能や学習成果に関する発言が多かったため、「Content」と命名した。

第 2 の大カテゴリー「Communication」に分類された発言は合計 18 個 (9%) であった。このカテゴリーには、英語のスピーキングや学習成果に関する発言が含まれていたため、「Communication」と命名した。

第 3 の大カテゴリー「Cognition」に分類された発言は合計 18 個 (9%) であった。このカテゴリーには、多様な思考や英語を活用した思考のアウトプットに関する発言が含まれていたため、「Cognition」と命名した。

第 4 の大カテゴリー「Community」に分類され

表4 グループインタビューの内容とその分類 (成果)

大カテゴリ	中カテゴリ	小カテゴリ	代表的な発言
Content	Contentの習得	体育の技能の保証 (2)	体育の技能という面が保障されていたという点で、それは成果と言えるんだと思います。
		体育の技能習得の促進 (1)	促進されていたと思います。
		体育の学習成果の担保 (1)	学習成果は、私は担保されたんじゃないかなと思います。
Contentの難易度の適切さ	Contentの難易度の適切さ	技能の簡単さ (1)	今回はこのContent、あの子供たちそれぞれその新規性にも関わってくるけど、あれくらいシンプルなもの良かったかな、という感じですね。
		開脚跳びの簡単さの良さ (4)	って考えたら、開脚跳びってよかったですよね。
		導入としての開脚跳びと感嘆詞 (1)	跳び箱の開脚跳びとか感嘆詞っていうのが、めちゃめちゃ基礎的じゃないですか、っていう面で見たら私は、スピーキングの面は伸びてると思って
Communication	言語の習得	感嘆詞の理解 (1)	感嘆詞をまあ理解して使うことができた生徒が多かったので、その成果はあったのかなあとすごく思いました。
		英語の学習成果の担保 (1)	学習成果は、私は担保されたんじゃないかなと思います。
		英語を使った共通理解 (5)	言語に対する共通認識が持ちやすかった
Cognition	高次思考	英語使用のきっかけ (3)	英単語を使うきっかけになって
		感嘆詞を用いた評価 (9)	「Perfect」という言葉が分析評価として出てきたから、高次思考だった
		多様な思考 (4)	いろんな思考を働かせていた
Community / Culture	児童間のCommunityの深まり	英語を活用した思考のアウトプット (5)	英語を使うことで、思考をアウトプットする機会が多かった
		フィードバック回数の増加 (2)	おそらく評価の回数は圧倒的に多いのではないかと思います。フィードバックの回数が
		コミュニケーションの増加 (1)	コミュニケーションの機会が必然的に増えたよ
Community / Culture	教師間のCommunityの深まり	別の校種でCLILを取り入れる難しさ (2)	高校とかでCLILを導入して下さいって言われたら、教師はどうするのかなって思っ
		高学年で実施することのCommunityに関する利点 (1)	5・6年生だからありがたいことに、コミュニティができたと言うこともあるんですね。
		英語で学ぶことによる副次的な効果 (3)	内容を学ぶ中で勝手に英語力も伸びてくるから、第一目的ではないけど、実は副次的に学んでいくことができると言うこと。
Community / Culture	教師間のCommunityの深まり	CLILが児童のCommunityに与えた影響 (8)	子どもたちが最後にSee you laterって言っていました。
		会話が増えた理由 (4)	英語だから生徒同士の評価が曖昧だったから、共通認識するために、話し合う機会というのが促進されたのかなって。
		子ども同士の距離が近くなる (4)	子どもと先生だけじゃなくて、子ども同士も距離が近くなる。
Community / Culture	教師間のCommunityの深まり	主体的・対話的な学びの前に作られるべきCommunity (3)	主体的対話的なところの対話は、絶対コミュニティがないといけないから、対話の前にコミュニティを作る環境づくりみたいなところのきっかけになる気がします。
		CLIL実践による教師間の繋がり (3)	CLILを準備段階からやるって言うことを考えたら、教師間に対話が生まれて、学校全体で教科横断的な土壌を作っていくと力育のにも役立つし、チーム学校に繋がって
		CLILを実践する教師の力 (4)	最初で言えば、まあ、その辺は教師の力量
Community / Culture	Communityを促進するための方策	継続することで高まると考えられるCommunity (3)	言語もそうだし、CultureやCommunityはその回数を重ねれば重ねるほど、高まっていく可能性があるというのを感じます。
		言語を学ばせることで自然と発生するCommunity (4)	Hiddenカリキュラム的な
		授業の中で教える英語と科目内容のバランス (3)	コミュニティを作るための英語の持ち方というのもちろんあるんだろうおねと思っ
Community / Culture	教師と生徒の関係性の改善	子どもと教師の距離が近くなる (2)	子どもと先生のコラボレーションのように。
		教師と生徒がともに学び合う姿勢 (2)	一緒に学んで行こうという、教師と子どもとの関係性が見えた
		教師の弱みの表出 (7)	英語ができない先生も多から、強い体育教師の弱みを見せる機会になるかもしれない
Community / Culture	教師と生徒の関係性の改善	教師と生徒の関係性の接近 (10)	いつもの体育の先生が、CLILをしたら子どもたちと近くなるかもしれないと思っ
		教師の学習 (3)	先生が学習してきたのがわかる
		CLILが児童のCultureに与えた影響 (8)	子どもたちが最後にSee you laterって言っていました。
Community / Culture	教師と生徒の関係性の改善	評価することの英語への良い影響 (2)	まず段階付けをすること自体は、それはすごく有効だし、それは英語にとっても使
		英語の感嘆詞と評価の相性の良さ (2)	英語の感嘆詞の評価の視点にも使われていたじゃないですか、それがすごく良
		英語と感嘆詞の相性 (2)	その雰囲気で作られたという点で英語と感嘆詞が有効だったのかなという風に思っ
Community / Culture	教師と生徒の関係性の改善	感嘆詞と評価の相性の良さ (3)	コミュニケーションが感嘆詞を使えるって言うところだったら、ちゃんと機械もす
		技能と評価の相性 (1)	スキルを思考判断して、言葉で出していくことがすごく良かった。
		CLIL授業の新規性 (1)	児童たちの新鮮さですごく楽しんで新鮮を求めて、
Community / Culture	教師と生徒の関係性の改善	本授業の発展の可能性 (1)	その発展性という意味では、今言われていた技のところもあるし、英語の面で言っ
		ステップバイステップ (2)	たら、理由を言われてきたよね、あれを英語でできるで、それこそ文の使い方
		英語と跳び箱の2つに挑戦できることの良さ (2)	まあステップバイステップという視点で、
Community / Culture	教師と生徒の関係性の改善	学習目標が2つあることの良さ (4)	今回はしゃべらうとする1つ目の挑戦、自分の中の挑戦と、あと体育も跳び箱に挑戦
		CLIL体育で身に付くスキルの可能性 (5)	しないといけないことじゃないですか
		他教科よりCLILとの相性が良い体育 (3)	実は2つのContentの目標があったっていうのが、子供たちにとってはパッと見た感じ
Community / Culture	教師と生徒の関係性の改善	他教科で行われるCLILとの違い (3)	分散する気がするけれど、意外とよかったのかもしれない
		感嘆詞を用いた評価の視点 (3)	CLIL体育の可能性は高いです。
		CLIL体育への期待 (3)	CLILと体育の相性いいなって改めて実感しました。
Community / Culture	教師と生徒の関係性の改善	CLILにおける体育の有効性 (1)	スキルが実わってきますよね
		Cognitionに関するCLILと体育の相性 (4)	評価基準を意図的に前半では言わなかったんです。
		Culture (文化)に関するCLILと体育の相性 (2)	期待しないですけど
Community / Culture	教師と生徒の関係性の改善	Communityに関するCLILと体育の相性 (1)	体育はやっぱ見えるから、それについて児童も話し合いやすいっていう利点があ
		準備することで克服できる教師の英語力の問題 (4)	と思うし、体を動かすことでワクワクするからそこ大きいかなと。
		英語が与える教師のポジティブな雰囲気 (2)	思考を高めるのに、CLILと体育は相性がいいかもしれない
Community / Culture	教師と生徒の関係性の改善	CLILを実践する教師に求められる資質能力 (4)	オリバ教育を英語でやりましたよとか、日本のcultureを使いましょうとか、文化
		体育が苦手な教師でもCLIL体育を用いられる展望 (1)	と体育は相性がいいですね
		CLIL実践の蓄積の必要性 (3)	communityが使えるのは、体育では非常にいい
Community / Culture	教師と生徒の関係性の改善	授業の新鮮さ (3)	communityが使えるのは、体育では非常にいい
		英語を通した思考力向上の可能性 (3)	中学校英語でなんかなるなって思ったので、ちゃんと自分で想定したらいいの
		集中力向上の可能性 (3)	ではないかなと思っ
Community / Culture	教師と生徒の関係性の改善	CLIL授業の新規性 (1)	英語を使う時ってアンション高くなりますよね。
		評価する方 (2)	教師の謙虚さみたいなのが求められるかもしれないですよね。
		英語を聞く際の集中力 (10)	体育が苦手な先生にとっては、そもそも体育を苦勞していた中に、英語は別に苦
Community / Culture	教師と生徒の関係性の改善	CLIL実践の蓄積の必要性 (3)	じゃない可能性もありますよね。
		英語を通した思考力向上の可能性 (3)	実践の蓄積が重要だなと思っ
		集中力向上の可能性 (3)	英語を教えることで新鮮さが増すかもしれない
Community / Culture	教師と生徒の関係性の改善	CLIL授業の新規性 (1)	一度頭の中までとめて、どう言ったらいいんだろうみたいな思考が働くかもしれ
		評価する方 (2)	CLIL体育にはConcentrateを引き出す可能性がある
		英語を聞く際の集中力 (10)	児童たちの新鮮さですごく楽しんで新鮮を求めて、
Community / Culture	教師と生徒の関係性の改善	集中して授業に取り組み姿勢 (3)	内省的な評価の方がつた
		CLIL実践の蓄積の必要性 (3)	ホワイトボードでの説明時にみんなが集中して聞いていたというのが印象にあ
		英語を通した思考力向上の可能性 (3)	す
Community / Culture	教師と生徒の関係性の改善	集中して授業に取り組み姿勢 (3)	他の授業では、後で遊んでいたりしている子がいたが、この授業では集中して

表 5 グループインタビューの内容とその分類 (課題)

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	代表的な発言
Communication	言語レベルの設定	言語の難易度 (2)	子どもたちにとって、英語の難易度が低かった
		言語能力の到達基準 (3)	単語を発する力を英語の言語能力として設定していいのか、文章で説明できるところまでするのか、その基準をどう設定するかが課題
Community	児童の発達段階に応じた Community 作りに関する課題	高学年で実施することの Community に関する難しさ (4)	3年生だったら、最初の段階では、5、6年生よりもできていたかもしれないと思いました。
		CLIL で作られた Community の継続性 (5)	継続的なものを見たいです。
教師に関する課題	教師の英語力に関する課題	コミュニケーションの限界 (1)	コミュニケーションがそもそもコミュニケーションをしていないというグループだったんですね。
		英語を使用することの難しさ (1)	オールイングリッシュだったらやりづらいです。
		教師に必要な英語力 (3)	小学校でも先生なる時英語のテストがなかったわけだけど、今は文科省から英語を教えてくださいってなっているわけだから。
		教師の英語力によって決められる限界 (3)	僕の能力では感嘆詞の意味づけとか英語を使わないといけないとか英語を使うことに楽しさとか伝えられるかって言われたら、そこは伝えられないかなって言う、ただ感嘆詞を使わせることはできてるって感じですね、ぐらいのレベルになっちゃうかなと、そこに関しては。
	教師への負担	英語が堪能な児童への対応の難しさ (7)	クラス一人にめっちゃ英語ができる子がいたら、萎縮しちゃうかもしれないです。
		生徒理解の重要性 (3)	体育で助けてくれる子供もいれば、英語で助けてくれる子供もいるので、それを見極める力っていうのが、求められてくるのではないかと。
		小学校教員にとって体育と英語のタスクが強いられること (4)	英語ができない先生は逆にタスクが2倍になるっていう。
		知識以上に必要になってくる教師の力量 (4)	ファシリテーター的な役割を教師がもっと自覚して授業をするっていう視点が生まれてくる。
		教師によって異なる CLIL との相性 (2)	先生にとって合うか合わないか。
		授業内容と英語の取り入れ方のバランス	恥ずかしい内容になった時どのバランスでやっていたほうがいいかという。
CLIL 体育の課題	授業効果を測定することの難しさ	評価基準の不明確さ (1)	強いというなら、Perfect とか Good の違いをもう少し明確にするべきだったかどうかっていうところが、あの後の協議会でも出てきたと思うんですけど、まあどっちがよかったのかなっていうのは私も分からないままなのでいろんな人の意見を聞いてみたいなど、思うところがあったなあということですね。
		発達段階の考慮 (2)	発達段階に合わせた内容を選択すべきだったのか、教師の力量の問題なのか。
	英語を取り入れることで起きる弊害	内容選定の難しさ (1)	Content は吟味していく必要が、通常の体育と同じように吟味していく必要があるなと思いました。
		題材の選定 (2)	いろんなスキルが複合して、でてくるようなタイプのスキルが出てくるときには、まあちょっと難しいですけど
本授業の課題	継続して授業をすることの必要性	思考の単純化 (4)	英語のため、言いたいけど言えなくて、単純な答えや考えになってしまう場面もみえました
		CLIL 授業の課題の設定 (3)	日本語だったら、この生徒たちにはもっと複雑な課題を出せたのではないかと
		評価に対する共通認識の徹底 (3)	今日みたいに評価をやるのであれば、評価の全員の共通認識を作ることは丁寧にしないとけないが、難しい、課題でもある
その他		1回の授業で成果を見出す限界 (5)	断片的にじゃないですけどちゃんと時間軸を追って担任の先生とかにも意見を聞かないことには、ここについては判断しかねると
		CLIL を実践する際に当てる焦点 (3)	4C の中でどこにフォーカスを当てるかが重要ではないでしょうか。

た発言は合計 77 個 (37%) と、2 番目に多かった。このカテゴリーには、児童間や教師間のコミュニティの深まりに関する発言を含んでいたため、「Community」と命名した。

そして、第 5 の大カテゴリー「CLIL 体育の可能性」に分類された発言は、合計 85 個 (41%) と最も多かった。このカテゴリーには、CLIL 体育の発展性や CLIL と体育の相性の良さ、CLIL 体育が教師へ与える影響に関する発言が含まれてい

たため、「CLIL 体育の可能性」と命名した。なお、分析の詳細な結果は表 4 を参照されたい。

4.2. CLIL 体育実践の課題

表 5 は、本実践の課題に関するグループインタビュー結果を示している。大カテゴリーとして、「Communication」、「Community」、「教師に関する課題」、「CLIL 体育の課題」、「本授業の課題」、「その他」の 6 つに大別された。

第1の大カテゴリー「Communication」に分類された発言は、合計5個(6%)であった。このカテゴリーには、言語の難易度や言語能力の到達規準に関する発言が含まれていたため、「Communication」と命名した。

第2の大カテゴリー「Community」に分類された発言は、合計10個(12%)であった。このカテゴリーには、Community作りの難しさやCLIL体育で作られたCommunityの継続性に関する発言が含まれていたため、「Community」と命名した。

第3の大カテゴリー「教師に関する課題」に分類された発言は、合計41個(50%)と最も多かった。このカテゴリーには、教師の英語能力や教師への負担に関する発言が含まれていたため、「教師に関する課題」と命名した。

第4の大カテゴリー「CLIL体育の課題」に分類された発言は、合計15個(18%)であった。このカテゴリーには、授業効果の検証の難しさやCLIL体育のカリキュラムにおける位置づけに関する発言が含まれていたため、「CLIL体育の課題」と命名した。

第5の大カテゴリー「本授業の課題」に分類された発言は、合計8個(18%)であった。このカテゴリーには、本授業における評価課題の共通認識や授業の継続性に関する発言が含まれていたため、「本授業の課題」と命名した。

そして、第6の大カテゴリー「その他」に分類された発言は、合計3個(4%)であった。これらの発言が生成した小カテゴリーが、他のどの大カテゴリーにも属しないと判断したため設けられた。

なお、分析の詳細な結果は表5を参照されたい。

5. 考察

5.1. CLIL 体育実践の成果(1): 4C に着目して

5.1.1. Community

特筆すべき結果として、4Cの中でもCommunity/Cultureに関する発言数や小カテゴリーの多さが挙げられる。表4の大カテゴリー「Community/Culture」の中にある中カテゴリー「発達段階に応じたCommunity作りの違い」や「フィードバック回数の増加」といった結果が表出したことについては、対象学年や感嘆詞の特質から、このような成果が得られたと推察できる。

一方で、本研究の結果と同様の傾向を示す先行研究も散見される。例えば、坂本・滝沢(2019)の国際協働学習に関する授業では、児童への自由記述アンケートの中で、Community/Cultureに

関する記述が最も多かったという。また、体育での先行事例として、二五・伊藤(2017)が高等専門学校におけるサッカーの授業で生徒に対して行ったアンケート調査では、Communityに関する肯定的回答が、4Cの中で圧倒的に多かったという結果が出ている。

以上のように、先行研究における小学校や体育での事例においても、Community/Cultureに関する成果は表出している。また、本研究の結果も踏まえると、小学校においてCLIL体育を導入することには、児童間におけるコミュニティの活性化を促進する可能性があるといえるであろう。

5.1.2. Content

Contentに関する成果として、中カテゴリー「Contentの習得」の中には、小カテゴリー「体育の技能の保証」や「体育の技能習得の促進」などが分類された。このことから、技能習得に関して、授業実施者と観察者には、その保証と促進ができたことと捉えられていたことがわかる。

では、その要因として何が挙げられるであろうか。もう1つの中カテゴリーである「Contentの難易度の適切さ」の中に、小カテゴリー「技能の簡単さ」や「導入としての開脚跳びと感嘆詞」が生成されていた。この結果は、学習課題として簡単な技を設定していたことが要因といえるであろう。CLILにおいて、どのような内容を扱うかが、授業の成功の鍵を握っている(奥野, 2018)。すなわち、CLIL体育では、体育の内容及び英語の内容のどちらにおいても、レベルや目的に適合した内容設定がされていなければならないということである。そのような知見から、本実践で取り扱った体育の内容である開脚跳びに関しては、学習者に適したレベルに設定されていたといえる。そして、その成果として、技能習得の保証と促進がみられたと推察される。

5.1.3. Communication

Communicationに関する成果として、中カテゴリー「言語の習得」が生成されていることから、言語習得に一定の効果があったといえる。その中カテゴリーの中で、小カテゴリー「スピーキングの伸び」に分類される発言は8個あり、それは中カテゴリー「言語の習得」に分類された発言数の過半数を占めていた。その要因として、(1)英語の内容として感嘆詞を用いたこと、(2)他者の技を評価するという活動が設定されていたこと、の

2 点が挙げられる。

神宮ら (2001) によると、感嘆詞は第一印象による最初の言葉として発せられやすい言葉であるという。そして、英語でコミュニケーション活動を行う際には、インプットに加えて、アウトプットが必要不可欠である (小栗, 2019)。本実践では、児童同士が感嘆詞を用いて、技を評価し合うという学習を実施した。児童にとって、英語を文章にして表現することが難しいとしても、感じたことを即座に発するアウトプットはレベルに適していたことが窺える。そのような場面が多く創出されていたと考えられる本実践においては、言語習得の一助となっていたといえるであろう。

5.1.4. Cognition

Cognition に関する発言はそこまで多くはなかったものの、大きく 2 つの観点为本実践の成果として挙げられる。

まず 1 つ目は、即興で英語を用いることによる思考の機会の増加である。前項でも少し触れた通り、多くの日本人は、即興で英語を話すことに難しさを感じ、日本語を話すときよりも思考を巡らせながら文章を組み立てなければならない (清水, 2013)。なぜなら、普段触れることの少ない単語や、日本語とは異なる語順を整理しなければならないからである。一方、高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編 (文部科学省, 2018) では、「即興性」や「即興で話す」というキーワードが多く用いられている。すなわち、それらが、高等教育における英語教育の最終目的としても重要視されている部分であることがわかる。したがって、体育だけに限ったことではないものの、外国語活動とは異なる教科の中で、児童・生徒が即興で英語を話すことは、思考する機会を増加させ、また、それは日本における英語教育の目標達成にも繋がると考えられる。

2 つ目は、感嘆詞の効果である。大カテゴリー「Cognition」の中に、「感嘆詞を用いた評価」という小カテゴリーが表出していることから、感嘆詞を用いて他者の技を評価するという学習活動の目的がある程度達成されていることが窺える。Anderson et al. (2001) が提唱している CLIL における Cognition では、記憶→理解→応用→分析→評価→創造の順に高次思考へ上がっていくべきであるとされている。そのため、感嘆詞を覚えて、使い方を理解し、他者の技を見て評価するという活動が、高次の思考を促したと考えられる。

5.2. CLIL 体育実践の成果 (2) : 教師に着目して

本実践において、従来の CLIL の特徴である 4C に加え、教師に関する以下の 2 つの中カテゴリーが成果として表出した点は特筆すべきであろう。

まず 1 つ目は、大カテゴリー「Community / Culture」の中の中カテゴリー「教師と生徒の関係性の改善」である。具体的には、小カテゴリーとして「子どもと教師の距離が近くなる」などの成果が挙げられていた。また、教師に係る成果の 1 つとして、大カテゴリー「CLIL 体育の可能性」の中に、「英語が教師に与えるポジティブな雰囲気」という小カテゴリーが表出した。豊田 (2017) は、英文の要素を省略することによって、対話におけるリラクゼーションが生まれると主張している。本実践では、感嘆詞を使用していたことで、上述したような成果をもたらされたのではないかと考えられる。なお、この点についても、子どもと教師の距離感に影響を及ぼしたと推察される。

2 つ目は、大カテゴリー「Community / Culture」の中の中カテゴリー「教師間の Community の深まり」である。また、小カテゴリーとしては、「CLIL 実践による教師の繋がりの深化」が表出した。では、なぜこのようなカテゴリーが表出したのだろうか。その要因として、CLIL 体育が体育と英語の両方の学びを促進する (二五・伊藤, 2017 ; 岩田・赤松, 2019) という点が挙げられるであろう。というのも、現場の小学校教師が CLIL 体育を実践する際には、体育を得意とする教師や、英語を得意とする教師も積極的な関与を示さなければ、その実施は困難を有すると考えられる。実際に、本実践においても、事前に外国語活動を担当する教員と連絡を取り、実践に臨んでいた。このように、多様な教師が参加することで、教師同士のコミュニケーションの深化、また、コミュニティの構築が促進される可能性があると考えられた。

以上のことを踏まえると、CLIL 体育によって、教師と生徒の授業内における協同及び教師同士の協同がもたらされたのではないかと考えられる。したがって、本実践では、日本において CLIL 体育を実践する際には、5 つ目の C として、Cooperation (協同) の重要性が示唆された。

5.3. 本実践の課題

本実践においては、大きく分けて「CLIL における 4C に関する課題」と、「4C 以外に関する課題」の 2 つの課題が表出した。

まず、「CLIL における 4C に関する課題」の 1

つ目として、言語レベルの設定に関する課題が挙げられた。奥野ら(2018)は、CLILにおけるCommunicationでは、①Language of Learning(言語知識・言語使用)、②Language for Learning(言語スキルの学習)、③Language through Learning(学習を通じた言語使用)が促進されるべきであると述べている。5.1.3.では、感嘆詞の設定は児童のレベルに適していたと指摘した。一方で、感嘆詞の使用だけでは難易度が低く、このような観点の学習成果を高められていたと言いはない結果となった。

また、Community/Cultureに関する課題については、本実践の中で、児童や教師の間で作られたコミュニティが、今後の体育授業や他教科の授業でどのくらい継続するのか、疑問点が残った。この課題については、今後継続的な実践と検証を行っていく必要がある。

続いて、「4C以外に関する課題」として、「教師に関する課題」という大カテゴリーが表出している。その中でも、「教師の英語力に関する課題」という中カテゴリーが生成されていることに着目したい。高橋・柳(2017)は、小学校の教師の英語能力はそれほど期待できないことをCLIL実践の課題として挙げている。本実践では、英語力の高い大学院生によって授業が実施された。しかし、今後幅広い場面でCLILを実践していく上では、教師の英語力も加味した授業計画が重要になるであろう。

さらに、「教師への負担」という中カテゴリーも生成された。CLILは「質の高い外国語活動」(星野, 2017, p. 31)であるべきということを踏まえると、CLILを実践する教師には、英語に関する知識や理解、教材研究が必要となる。そのため、5.2.で述べたように、教師同士の助け合いも重要となってくると考えられる。しかし、それでも英語が専門でない教師にとっては、大きな負担となると考えられる。今後、多くの教師がCLIL体育を行えるようになるためには、CLIL体育の事例の蓄積が必要不可欠であろう。

6. おわりに

6.1. 本実践からみえたCLIL体育の可能性

本実践を通して、日本におけるCLIL体育の可能性として、以下の2点が挙げられた。

(1) CLILと体育の相性の良さ

本実践より、日本の小学校においてもCLIL体育の一定の成果が得られた。このことから、欧米

の先行研究で示唆されているように、学習者にあった適切なレベルで計画・実施されれば、体育はCLILと相性が良い教科である。

(2) Cooperationの可能性

適切なレベルの教科内容(Content)及び英語の内容(Communication)を用いた思考を促す活動(Cognition)がCLIL体育の中で実践されれば、児童内のコミュニティ(Community)の促進に繋がることが期待できる。さらに、CLIL体育を実践する上で、教師間の協力や児童と教師の協同の創造も切望でき、CLIL体育の5つ目のCとしてCooperation(協同)が新たな軸となる可能性が示唆された。

6.2. 今後の課題

最後に、本研究の知見から、今後、CLIL体育が実践される上での課題と、本研究における課題の2つの視点からそれぞれ整理する。

(1) CLIL体育が実践される上での課題

CLIL体育が実践される上での課題として、以下の2点が挙げられた。1点目は、児童に適した言語レベルを設定するためには、多くの実践の中で試行錯誤する必要があることである。2点目は、英語力の向上や教材研究を含め、教師の負担が大きくなることである。なお、この課題を改善していくためには、同僚との関わり合いだけでなく、事例の蓄積が不可欠であろう。

(2) 本研究の課題

本研究の課題としては、以下の2点が挙げられた。1点目は、児童の学習成果といった側面から検証できていない点である。本研究では、小学校のCLIL体育について、実施者と観察者による客観的な評価からその成果と課題をまとめた。そのため、子どもの学習成果とともに、その成果を報告することができれば、CLIL体育の意義がより強調されるようになると考えられる。2点目は、本研究が事例研究であったため、CLIL体育の成果の経過を調査できなかった点である。そのため、CLIL体育で創出されるコミュニティなど、成果の継続性や発展性を見とるためには、縦断的な調査が必要となるであろう。

<引用・参考文献>

1. Airasian, W., Cruikshank, K. A., Mayer, R. E., and Pintrich, P. R. (2001) A taxonomy for learning, teaching and assessing: A revision of Bloom's Taxonomy of

- educational outcomes. Complete edition. Longman: New York.
2. Celina, S., and Oscar, C. (2017) CLIL in teaching physical education: views of the teachers in the Spanish context. *Journal of Physical Education and Sports*, 17 (3): pp. 1130-1138.
 3. Clancy, M. E., and Hruska, B. L. (2005) Developing Language Objectives for English Language Learners in Physical Education Lessons. *Journal of Physical Education, Recreation & Dance*, 76 (4): 30-35.
 4. Coral, J. (2010) L'aprenentatge de l'anglès a través de l'educació física: el programa Mou-te i aprèn (English Language Acquisition through Physical Education). *Temps d'Educació*, 39 : 149-170.
 5. Coral, J., and Lleixà, T. (2014) Physical education in content and language integrated learning: successful interaction between physical education and English as a foreign language. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 19 (1): 108-126.
 6. Coyle, D. (2007) The CLIL quality challenge. In D. Marsh, & D. Wolff (Eds.), *Diverse contexts - Converging goals: CLIL in Europe (Mehrsprachigkeit in Schule Und Unterricht; Vol.6. Peter Lang Pub : Frankfurt, Germany.*
 7. Coyle, D., Hood, P., and Marsh, D. (2010) *Content and language integrated learning.* Cambridge University Press: Cambridge.
 8. デンジン・リンカン: 平山満義ほか訳 (2006) 質的研究ハンドブック 3巻: 質的研究資料の収集と解釈. 北大路書房: 京都.
 9. 藤原真知子 (2018) 小学校での CLIL 実践—ABC カルタを使って日本を発信—. 聖学院大学総合研究所 NEWSLETTER, 28 (2) : 49-52.
 10. 星野洋美 (2017) 外国語活動と他教科の連携による内容言語統合型学習の成果と課題: 家庭科との連携による CLIL 実践の試み. 常葉大学外国語学部紀要, (34) : 25-33.
 11. 岩田昌太郎・赤松一成 (2019) 双方向の能力が高まる「体育×英語」の授業—「体育手段論」を超えて—. *体育科教育*, 67 (9) : pp. 26-29.
 12. 岩田昌太郎・齊藤一彦・伊藤真・三村真弓 (2018) グローバル人材育成に資する教科連携型の Content and Language Integrated Learning (CLIL) の実証研究: 中学校における技能教科のパイロット・スタディ. 広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト報告書, 16 : 31-40.
 13. 神宮英夫・竹本裕子・妹尾正巳 (2001) 感情を活かしたものづくり. *人間工学*, 37 : 254-255.
 14. 神家一成 (1984) とび箱運動. 器械運動教材研究会編著, 器械運動の教材研究. タイムス: 大阪, pp. 101-152.
 15. 川喜田二郎 (1986) KJ法: 混沌をして語らしめる. 中央公論社: 東京.
 16. 工藤泰三 (2018) 地球的課題を扱う CLIL 授業実践における高次思考を促す試み. 名古屋学院大学論集 言語・文化篇, 29 (2) : 39-50.
 17. 久保賢太郎 (2016) 跳び箱運動台上前転: より大きくより美しく. 東京大学附属世田谷小学校研究紀要, 48 : 154-161.
 18. 松井孝彦・藤原康弘 (2017) 小学校英語活動としてのモジュール型の算数の CLIL 実践. 教職キャリアセンター紀要, 1 (2) : 85-92.
 19. 松尾由紀 (2019) 日本の中学校英語授業における CLIL: 言語と教科の到達目標を明確にした単元試案. *立命館教職教育研究*, 6 : 11-21.
 20. Mehisto, P., Marsh, D. (2011) Approaching the economic, cognitive and health benefits of bilingualism: Fuel for CLIL. *Content and foreign language integrated learning: Switzerland.* pp. 21-47.
 21. メリアム: 堀薫夫ほか訳 (2004) 質的調査法入門—教育における調査法とケース・スタディ—. ミネルヴァ書房: 東京.
 22. 文部科学省 (2017) 小学校外国語指導要領外国語活動編. 東洋館出版社: 東京.
 23. 文部科学省 (2018) 高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編. 開隆堂出版株式会社: 東京.
 24. 二五義博 (2013) 算数の計算を活用した教科個横断型の英語指導—小学校高学年児童を対象とした英語の数の学習を事例として—.

- 小学校英語教育学会誌, 13 (0) : 84-99.
25. 二五義博・伊藤耕作 (2017) 高専 1 年生に対する体育 CLIL の可能性－英語を使用したサッカーの授業を事例として－. 大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要, 第 14 号抜刷 : 125-142.
26. 小栗裕子 (2019) 学習意欲を高める指導法 : コミュニケーション能力育成の視点. 関西外国語大学, 研究論集 (110) : 203-2011.
27. 奥野由紀子 (2018) 第 1 章 CLIL って?. 奥野由紀子編, 日本語教師のための CLIL 入門. 株式会社凡人社 : 東京, pp. 2-40.
28. 坂本ひとみ・滝沢麻由美 (2019) オリンピック・パラリンピックをテーマにした国際理解教育－CLIL による英語授業実践－. 東洋学園大学紀要, 27 : 139-158.
29. 清水英之 (2013) 日本人が英語で考えられない原因 : 語順の違いと英語音声の特質. 学習院女子大学紀要, 15 : 87-100.
30. 新村出 (2018) 広辞苑第七版机上版あーそ, 岩波書店 : 東京.
31. 高橋美由紀・柳善和 (2017) 小学校・中学校における英語による教科指導の実践－シンガポール日本人学校における事例研究を基にして－. 中部地区英語教育学会紀要, 46, (0) : 185-192.
32. 高橋健夫・三木四郎・長野淳次郎・三上肇・鈴木荘夫 (1992) 器械運動の授業づくり. 大修館書店 : 東京.
33. 豊田昌倫 (2017) 会話の英語とは. 豊田昌倫・堀正広・今林修編著, 英語のスタイル : 教えるための文体論入門. 研究社 : 東京, pp. 72-86.
34. 米山朝二 (2011) 新編 : 英語教育指導法辞典. 研究社 : 東京.